特論　国際社会と大学

はじめに

齋藤　　寛
（外国人留学生指導センター長・医学部教授）

大学は何をもってその存在価値を主張できるか，あるいは大学の存在意義は何か，という問題は古くかつ新しい。この命題に常に正面から取り組んできた大学のみが真の大学であり，無限の発展性を有する組織体と考えることができよう。

新しい社会創造に対して大学はどのような貢献ができるかという問題は，疑いもなく大学の存在意義そのものと深く関わっている。本章では，大学は国際社会にどのような貢献ができるか，またそのためには今，どのような問題があり，今後何がなされなければならないか，という視点からこの問題へのアプローチを試みる。

文化を異にする世界中の人々が日本の大学で勉強する，このことが日本および日本以外の世界の国々にとって，大きな貢献であることは改めて述べるまでもないであろう。このことを通して，日本のみならず世界における新しい社会の創造に参加していくこと，そこにこれからの大学の存在意義があることを私たちは確信する。

しかしながら，解決されるべき問題が山積みしていることを，私たちは知らなければならない。

本章では，長崎大学外国人留学生指導センターの専任教官として，主に日本語教育を中心に日々留学生教育にあたっている上條厚と志柿光浩が，自らの経験と，これまでの留学生教育に関する調査や考察をもとに，今，何が大学に求められているかという理念の問題，そして具体的な留学生教育上の問題の二つに分けて論じている。

留学生の受け入れを中心とした大学の「国際化」はもはや現実であり，それぞれの大学としても積極的に取り組むべき課題となっている。これらの論考が，これからの新しい大学の創造に向けての大学の自己改革の過程の中で，また大学の現状と未来について社会全体の理解を得ていく上で，大いに参考とされることを期待する。